

ペール・ラーゲルクヴィスト『こびと』を読む  
—語り部“小人”を軸に—

スウェーデン語専攻 山口祐奈

目次

1. はじめに
  - 1.1. 問題提起
  - 1.2. 論文要旨
2. 作品背景
  - 2.1. 作者ラーゲルクヴィストの人生とその代表作
  - 2.2. ラーゲルクヴィストの作風，傾向
3. 本論，『こびと』について
  - 3.1. あらすじ
  - 3.2. 作品分析
    - 3.2.1. 登場人物
    - 3.2.2. 信仰とそれに関連するモチーフ
    - 3.2.3. 大公と小人
    - 3.2.4. 小人の正体
4. まとめ
5. 使用テキスト，参考文献

## 要約

ペール・ファビアン・ラーゲルクヴィスト (Pär Fabian Lagerkvist, 1891-1974) は『バラバ』 *Barabbas* でノーベル文学賞を受賞した世界的にも高名な作家である。ラーゲルクヴィストの作品は文体や文法は無駄をそぎ落とした簡素なものである一方で、作品のテーマは自己や神の探求という難解なものである。そのためか、特に日本において、彼の代表作『バラバ』以外の他の作品に関しては研究があまり進んでいない。本論文はラーゲルクヴィストと彼の作品に対する研究をより多角的なものにするべく、日本で研究があまり進んでいない『こびと』を扱い、作品の根底にあるラーゲルクヴィストの考えや『こびと』において重要な存在である小人がどういった存在なのかについて考察していく。

第二章では当時の時代背景にも触れながらペール・ラーゲルクヴィストの人生とその代表作、また作風について紹介する。19世紀の終わりに生まれたラーゲルクヴィストは幼少期や青年期に時代の変化を目の当たりにした。ノルウェーとの連合の終焉、工業化やそれによって旧来の価値観が崩壊する様はラーゲルクヴィストを葛藤させた。この古いものと新しいもの、モダニズム、そして神やキリストに対する葛藤がラーゲルクヴィストを世界的作家たらしめたのである。『こびと』に関して言えば、この作品は1944年に出版されたものである。当時は世界中が第一次、第二次世界大戦によって混迷していた。作中登場する戦争の場面からも世界大戦が『こびと』に影響を与えているは明らかである。『こびと』で世界的に成功し、1951年に『バラバ』でノーベル文学賞を受賞したラーゲルクヴィストであるが、彼の創作物の根底にあるものはその時代の影響をそのときどきで受けつつもあくまでも一貫している。彼は葛藤しながらも信仰などの自己の起源について生涯をかけて探求し、作品を生み出し続けたのである。

本論にあたる第三章ではあらすじを簡単に述べた後、『こびと』を四つの観点から分析する。登場人物の項目においては彼らが神やキリスト、人間が内包する残酷さを様々なエピソードでもって表象しているということを指摘した。ラーゲルクヴィストは自己の考えを表現するために彼らにそういった役割を与えたのである。次に、作品で最も重要なテーマの一つである“信仰”と、作品の中の出来事の多くがこの

“信仰”に関連付けられていることに注目した。一見信仰という行為とは無関係なように思われる戦争や病気といったモチーフも小人独特の感性から非日常化され、根底で信仰と繋がっていることが読者に示される。それによってラーゲルクヴィストは「人間は信仰を蔑ろにしているのではないか」という疑いを提示しているのである。

以上のことを素地として物語の語り部である小人について、大公と小人の関係性を作中の場面やユング心理学のペルソナとかげという考えに基づきながら考察した。小人は大公が持っている悪感情の表象である。また、小人がそれを読者に示すことで作中の人物たちの大公への盲従がより明らかに示される。それと同時に小人はあくまでも人間ではないことは作中の表現からも明らかである。そこで、この小人とは一体何ものなのか、小人の正体の項目でラーゲルクヴィストの他の作品に登場する“人ではない”存在にもヒントを求めながら考察した。世界シンボル大事典に依れば小人とはもともと邪悪なイメージを持つ。作中、これが人間から生まれるということも併せると小人という存在は人類の悪感情が表面化した存在だと考えられるのではないだろうか。また、作中で小人はキリストと正反対でありながらも関連づけられて描かれている。人に見下されている小人が実のところキリストと関連があるというのは、私たち人間の盲目さが批判されているばかりではなく、作者のキリスト像がいかに特殊なものであるかを示している。小人はその独特で悪意に満ちた感性で様々なものを非日常化する。そのことによって彼は私たち読者が普段当たり前のものとしていることの本質を暴き出している。以上のことより、小人はその特殊な存在感をもってラーゲルクヴィストの持つ疑念を私たち読者に示すという役割を持っているといえるだろう。

以上の考察によって、『こびと』という作品の根底には人間の愚かさや身勝手さへの批判と信仰に対する葛藤があることが明らかになった。